

PONO²

ポノ・ポノ

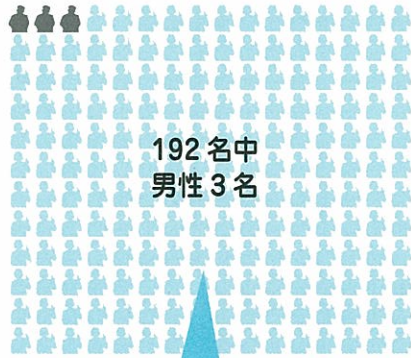
vol.11

2008.3 発行 浦安市 市長公室 企画政策課 人権・男女共同参画班
〒279-8501 浦安市猫実1-1-1 TEL 047 (351) 1111
編集：「ポノ・ポノ」vol.11 編集会議・市民編集員

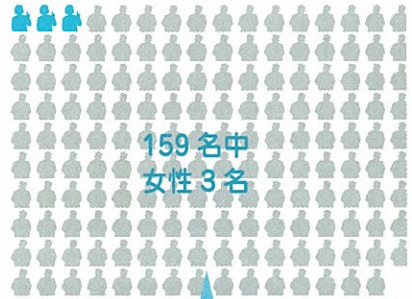
特集 垣根を越えて

あなたが保育士や消防士の姿を思い浮かべるとき、それは女性ですか、それとも男性ですか。下図は浦安市採用の保育士、消防士の男女比を表したものです。かつては「女の園」、「男の聖域」と言われ、女性の職場、男性の職場とされてきた領域へ、男性が入り女性が混じりはじめています。今回ポノ・ポノでは、刑事、栄養士を加えて、浦安市内で働いている4人にインタビューをしました。男女の垣根を超え、自分らしくイキキと働くことについて、考えてみませんか。

保育士



消防士



※いずれも平成19年4月1日現在の浦安市採用職種別職員数
※消防士は緊急救命士含む

「出て行く」看護を志望し、女性ならではの視点で励みたい



浦安消防署 救急隊員 升田久美子さん (32歳)

以前は、大阪の病院の救命センターで看護師をしていました。手遅れになる患者さんもいて、病院で待っているのではなく、搬送されてくる前に一刻も早く助けたいと考えるようになり、救急隊員になろうと思いました。そのときは、大半の自治体が25歳の年齢制限をしている1年ほど前でした。

あちこち探して、幸い、浦安消防署にたどりつけました。浦安では初めての女性消防署員でした。1年めは消防学校で学んだりして、2年めから救急隊員として現場に出動するようになりました。勤務は24時間通し、3人1組での出動になります。夜勤のある看護師をしていましたから、さほど苦にはなりません。

救急隊員は、重い救急資機材などを持ってかけつけますので、荷物を持ちながら患者さんを担架に乗せてマンションの階段を上り下りするときは、正直、大変です。でもそんなときは、男性の同僚がさりげなくサポートしてくれます。患者さんからも、気遣ってもらったりすると、恐縮してしまいます。

あるとき、すでに出産してしまった方の自宅にかけつけたことがあります。女性救急隊員だったので、ご本人も周囲も安心していただきました。「あなたが来てくれてよかった」と言ってくれたときなど、この仕事に就いてよかったと心から思えます。女性の患者さんには、男性救急隊員には見られたくないこと、聞かれたくないこともありますから。

ごく自然体で、栄養士の仕事を全うしたい



浦安市健康増進課 栄養士 林田充徳さん (42歳)

子どもの頃、喘息で病気がちだったので、漠然と医療や保健関係の仕事に就きたいという思いがありました。それで、料理や食べ物にも関心があったことから、栄養士を志しました。

これまでは、保育園での給食業務、健康増進課での市民の方対象の食事相談や調理実習などの仕事を行ってきました。保育園で、離乳食やミルクを上げていた子が卒園していくときや、メタボ予防教室に参加された方から「検査値が改善されました」と感謝されたときなどは、人の役に立てたのかなあと感じて、うれしい気持ちになります。

栄養士自体も圧倒的に女性が多いですし、現在の仕事の対象者も、妊婦さん・乳幼児とそのお母さんから老人クラブ連合会の女性部の方々などという状況です。大勢の女性の中にいることに、若い頃は抵抗感もありましたが、いまは、ごく自然にできているかと思います。でも、離乳食教室では、自分がいると参加者が授乳しにくいのではないかと気になることがあります。女性が多い環境に無頓着になりすぎることに注意しなければ、と思います。

自分の食生活はお手本になるようなものではありませんが、昼食は手作り弁当の持参を心がけています。煮魚・おひたし・和え物などの和食が好きです。日本人の食生活のさまざまな問題を考えると、「和食・手作り」ということを真剣に見直さなければならないと思っています。

子どもたち一人ひとりと気持ちが通う保育士を目指したい



浦安市立東野保育園 保育士 森川智さん (33歳)

卒業するとき、「このままサラリーマンになるのか…」と進路に悩みました。それで、やはり「子ども好き」という自分の気持ちを大切にしようと、この道を選びました。

いまから10年前のことで、浦安市では初めての男性保育士でした。当時は私を受け入れるために、トイレや更衣室などの環境づくりに気を遣って来ていました。自分としては「女性の多い職場に男性がひとり」など意識しませんでした。初めてのことで、受け入れる職場ではとまどいがあったかもしれませんが、いまではお互いに同僚として向き合えていると思います。

また、担任の保育士が男性だとわかったとき、子どもたちからワッと歓声が上がるとは反対に、複雑な表情を見せる保護者の方もいらっしゃいます。でも、飛びついてくる子どもたちと遊んでいる姿を見て、「お父さんのように遊んでくれる先生でよかった」と言ってもらったときはうれしかったです。

この仕事のいちばんの喜びは、日に日に成長していく子どもの様子を見られることです。受け持ちの子どもが目の前で初めて歩いたときには、自分の子どものように感じます。

現在、市採用の男性保育士は、私を含めて3人です。お互いに、研修などを通じて、ネットワークを深めていきたいですね。保育士としては、子どもたちの気持ちを細やかにくみとりながら、接していきたいです。

女性被害者の「傷ついた心」に共感したい



浦安警察署刑事課 刑事 原部千明さん (25歳)

学生時代、たまたま犬の散歩中に痴漢被害に遭ったという女性を見つけて、交番に連れていった体験が忘れられません。そこで対応してくれたお巡りさんがとても優しく、私も傷ついた被害者の話をあのように聞いてやれば、と考えて警察官になろうと決めました。

最初は旅行会社の準社員をしていました。1年後くらいに正社員にしたいと言われたのですが、刑事になりたいという夢をあきらめたくないと考えて辞職しました。1年後の採用試験に挑戦し、県警に採用されました。現在の浦安警察署刑事課に移って、間もなく1年になります。31人の刑事課員の中で女性は私だけと少なく、実際の事件に満足に対応できる数ではありません。

学生時代のあのお巡りさんはとても優しく対応していましたが、やはり内面的な部分では異性より同性のほうがよいと思うことが多くありますし、女性刑事のほうが、女性の被害者は心を開いて何でも打ち明けてくれるのではないかと、周囲から期待されています。

被害者の笑顔を見られたときは、刑事になってよかった、と心から思います。反面、荒っぽい言葉遣いの多い同僚の中で、きつく注意されたりしたときはへこむこともあります。まだ刑事になったばかりですが、経験を積んで、先輩たちのように一線の捜査にどんどん携わり、女性ならではの対応をしていきたいと思っています。

いま浦安の

すてきな人

志賀ユリ子さん



美浜東エステートに住む人たちでつくる「たすけあい・みはま」の代表。活動のきっかけや活動をおして見えてきたことなどをうかがいました。

「たすけあい・みはま」は、現在会員数25名で、お茶会、日帰り旅行会など、さまざまなイベントを企画し、会員同士の親睦を深めています。「いざ困ったときに助け合うためには、日ごろのコミュニケーションが大切ですからね」と、代表を務める志賀ユリ子さんはおだやかに話します。

発足のきっかけには、志賀さんの強い思いがありました。「看護師の資格を活かして、保育園で働いていたとき、福島県に住む義母が倒れ、遠距離介護が始まりました。忙しい夫の手はかりられず、仕事を辞め、介護に専念しました。長男の嫁でしたし…」

介護が一段落したとき、ふと周りを見渡すと、「敷地内でも別の棟に住む人とは話す機会もないんだな」と、仕事や介護をしていたときには気づかなかったことが見えてきたと言います。「家はただ寝に帰るところでしたから…」

でも、「自分は子どもたちの手をかりずに老いていきたい。そのためには、地域で助け合いながら生きていくことが必要なのでは…」と、志賀さんは考えるようになりました。マンション内のボランティア活動などに参加しながら、思いを同じくする人たちと構想を練り発足にいたりします。「立ち上げるまでに10年かかりました。現在8年めですが、まずはいいところも悪いところも含めて、お互いを知ること10年かけようと思っています」。そこには、地域の中でいつまでも自分らしく暮らしていきたいという思いが詰まっています。

会は親睦のほかにも活動の幅が広く、妻の介護をしている夫同士を引き合わせ、情報交換する場を設けたりしています。「介護の悩みを打ち明けあったり、お化粧はどうしてあげてる?なんてことが話題にあがります」。また、夏休みには小学生の見守り活動もしています。「小学校でラジオ体操があるので、マンションから学校まで一緒に行き、帰ってきます。忙しいお母さんたちの手助けができたらと思ってはじめてことです」

これからは介護や健康の知識などを勉強する会も企画していき、「たすけあい」のために本格的に動き出したいそうです。

「たすけあい・みはま」の活動でよかったことは何ですかとたずねると、「お友達がいっぱいできました」とニコリ。「もし、車いすの生活になっても、集会所まで押してもらってみんなに会いたいし、ベッドから動けなくなったとしても、ベッドの近くに来てほしいと思っています」

編集に携わって

この冊子は「ポノ・ポノ」vol.11 編集会議の市民編集員がつくりました。

河合信和：女性の救急隊員、刑事さんのお話をうかがい、モチベーションの強さがとても印象的でした。転職までされたの夢の実現でした。
斉藤ゆかり：無意識に持っていた性別役割分業の意識。その枠にしばられず、活躍されて

いるすてきな人に出会えたことに感謝。

伯野朋絵：インタビューでたくさんの方のお話を聞けました。自分の思いを実現した方々のストーリーは素敵で刺激的!

藤光英恵：消防の仕事が女性にしているとは、想像すらしたことがなかった。思い込みは、可能性を狭めてしまう?もったいない!

ハワイ語の「PONO」(意味は、正しさ、幸福、繁栄など)に由来します。2つ並べて「ポノ・ポノ」と声に出してみたときの響きが親しみやすいでしょう!?

「ポノ・ポノ」の意味

TKさん (40代、女性)

いまの生活を守るための収入を私が得なければならない。いまのパート勤務よりさらに仕事量が増えれば、家庭内の協力体制が欠かせない。まずは子どもたちを教育。そして、健康第一!

EIさん (40代、女性)

とにかく収入を…。大型運転免許を取って、ダンプカーの運転手をするかも。家事は今まで以上に子どもたちに手伝ってもらおう。



MMさん (30代、男性)

短期間であれば自分の母を呼ぶ。その際、仕事は早く終わるようにすると思う。長期間にわたるなら、実家に帰る。もしくは、仕事を当面休むだろう。

KMさん (30代、女性)

仕事ができるようになるまで、自分ひとりで、家事・育児・仕事をがんばる。(現在も共働き)

NMさん (30代、女性)

自宅マンションを売って地方都市である夫の実家へ行き、親兄弟に頼る。そして、パートに出て少しでも収入を得たい。夫は兄弟も多く、仲もよいので、うまくやれると思う。

MMさん (40代、男性)

ひとり暮らしが長かったので、家事は自分でできる。子どもの保育園のお迎えなどに地域力(ファミリーサポートセンターなど)を借りたいと思う。

YOさん (30代、女性)

会社の福利厚生の一環で、現収入とほぼ同じくらいの額が保障される保険のようなものに参加して、収入面では心配がいらぬ。パートに出ようと思うが、育児や夫の世話をする人手として、夫の親を呼ぶだろう。うまくいかなければ夫の実家に帰るかな。

KOさん (30代、男性)

サラリーマンが長期休業するのは難しいのが現実で、自分で稼がなければならないので、家事、育児は両親に頼む。共倒れしないためにも、この時点で最善の選択だと思う。

YNさん (30代、女性)

実家に戻り、結婚前に働いていた旅行会社で添乗員として働く。子どもは近くの保育園に預け、母にも協力してもらいたい。

NIさん (40代、男性)

まず、勤務時間を調整してもらい、家事に対応できるようにする。調整ができなかったら、転職を検討する。家事がスムーズにはこぶように、3人の子どもたちと役割分担をする。



そうなったとき、あなたならどうしますか?

夫が仕事、妻が家事・育児というこれまでの家庭の役割分担ですが、ポノ・ポノでは、万一、事故・病気などでパートナーが役割を果たせなくなった場合、どう対処するかを30代、40代の市民の方々に尋ねました。女性には、「夫が何らかの事情で仕事ができなくなったら」、男性には「妻が何らかの事情で家事・育児ができなくなったら」というケースで質問しました。



TKさん (40代、男性)

家族が健康だからこそ、いまの勤務状態(早朝に出勤、帰りは深夜)を続けてこれた。もしものことがあれば転職も考える。でも、いまの生活を維持するには収入は大きな要素なので、子どもたちと協力してがんばる。できる気がする。

KNさん (40代、男性)

食事はコンビニで弁当を買い、Yシャツはまとめてクリーニングに出すなどして、何とかする。子どもは都内にいる両親に預けたい。



ポノ・ポノからのメッセージ

ふだんは何も考えていない「万一」ですが、事故・病気以外にも災害なども、危険がいっぱいのいまの世の中です。お聞きした方の中には、意外と具体的な対応策を考えている方もおられました。1度は皆さんも、ご家族の中で「もしも」物語として話し合われてはいかがでしょうか。

うらやす NOW

いままで男性中心であった職業に女性が進出したことは、職場や上司からどのように受け止められているのでしょうか。浦安消防署長の須賀英雄さんにお話をうかがいました。

これまででは、男社会特有の荒い言葉が飛び交っていましたが、女性職員が入ってからは自然と周囲も言葉を選ぶようになり、職場の雰囲気も穏やかになったように思います。空気が変わりましたね。

現在、浦安消防署には救急隊員として看護を行う女性職員が2名、消防隊員の女性職員が1名います。女性だからこまで、と職務の範囲を限定することはありません。

救急隊に属する女性職員に対し、当初は、患者をストレッチャーに乗せるといった力仕事をこなせるか不安に思ったこともありましたが、しかし、実際のところは心配いりませんでした。考えてみれば、女性を中心である看護師も同じ力仕事をこなしているんですよ。

2月に新しい消防署の庁舎ができました。これまで男女共同で使っていたお風呂、休憩室などを男女別にし、ハード面でも男女が動く上で支障のないよう、態勢を整えています。もちろん、ソフト面である職員採用も、男女の別なく行っています。

消防も救急も人助けという使命があります。男性、女性に限らず、職員には強い意志を持ち、臨んでほしいと思います。